

タブリーズの絨毯貿易

坂 本 勉

I

タブリーズはトルコ・ヨーロッパ方面へ抜けるルートとザカフカス・ロシア方面へ抜けるルートとが交叉する国際的な中継都市として賑わってきた町である。1820年代末に開設されたタブリーズからエルズルムを經由してトラブゾンに至る新しい貿易キャラバンルートは、タブリーズというイラン高原西北部にある内陸都市をトラブゾン＝イスタンブル間の黒海航路に直結させ、さらにイスタンブルからヨーロッパへとつないでいた⁽¹⁾。

また、1828年のトルコマンチャイ条約によってイランとザカフカス・ロシアとの間の通商も発展し、タブリーズから北ヘゾルファ、エレバンを經由してティフリスに至るルートの重要性も増した。

これら二つのルートはイランが資本主義の貿易網に組み入れられる過程でつくられたり、盛んに利用されるようになってきたものである。これによってタブリーズは1830年代以降、トルコ・ヨーロッパ、ザカフカス・ロシアとの輸出入貿易においてイランでもっとも殷賑をきわめる商業都市になっていった。このあたりの事情をタブリーズに駐在していたイギリスの領事ジョーンズは1873年の議会報告のなかで次のように書いている。

「タブリーズの町は今世紀の初めからヨーロッパ＝ペルシャ貿易の中継

地であった。また1868年までは中央アジアとの中継地でもあった。この町は北のティフリスから来る幹線道路、西のトラブゾンから来る幹線道路、そしてテヘランに向う幹線道路とが交叉するところに位置している。人口は約20万人、他を圧してペルシャ最大、もっとも重要な都市である。

イギリス商品を北部のイランにもっとも早く輸入していたのはグルジアのアルメニア人であったように思われる。彼らはイスタンブルにおいてタブリーズの市場のために買い付けを行っていた。帝政ロシアの重関税政策がザカフカス諸地域にまで及ぶようになると、イラン貿易に従事していたかなりのロシア商人がタブリーズに住みつき、そこでヨーロッパとの貿易をかなりの程度、独占するようになった⁽²⁾。」

ここに記されているようにタブリーズはその立地条件に利せられ、少なくとも領事ジョーズが報告する1870年代はじめまではイランでもっとも人口の多い町であった。ただ残念なことに、タブリーズの場合、近代の各時期において人口がどのように推移したかを知ることは困難である。周知のようにカージャー朝支配下のイランにおいて全国規模の人口調査が統一的に行なわれたことは一度もなかった。しかし、ある特定の都市について散発的に人口調査資料を手にすることはできる。たとえば首都のテヘラン、カズヴィーン、コムに関してペルシャ語で書かれた生の文書、あるいは校訂された印刷文書にあたるのが可能である⁽³⁾。この他イスファハーンのような町に関しては現在、所在が不明の人口調査資料にもとづいて算出したと思われるハウツマ・シンドラーの間接的な統計を利用することもできる⁽⁴⁾。

タブリーズに関してこのような人口調査資料を今のところ利用できないので、差し当りイギリス側の資料を引くことで満足しなければならない。たとえば在テヘランのイギリス大使館書記官であったトムソンがまとめた1868年の報告がそれで、以下のごとくイランの主要都市の人口を記している⁽⁵⁾。

タブリーズの絨毯貿易

タブリーズ	110,000人	ハマダーン	30,000	アスタラーバード	18,000
テヘラン	85,000	シーラーズ	25,000	ブージェル	18,000
マシャッド	70,000	カズヴィーン	25,000	コム	12,000
イスファハーン	60,000	シュースタル	25,000	サブザワール	12,000
ケルマーン	30,000	ホイ	20,000	カーシャーン	10,000
ケルマンシャー	30,000	ラシュト	18,000	ゴルパーエガーン	10,000

これらの数字にどこまで信憑性があるのかは定かでない。トムソンの挙げる11万人というタブリーズの人口が、5年後の1873年、タブリーズ領事ジョーンズの報告によると20万人とされたり⁽⁶⁾、さらに1887年の領事報告において20万人とされるなど⁽⁷⁾、イギリス側の資料自体にかなり撞着がみとめられるからである。しかし、数字の当否はさておき、タブリーズがこの時期において最大の都市であったことだけは揺るがないように思える。

タブリーズは人口だけでなく貿易取引においてもイラン最大の都市であった。このことは先に引いたトムソンの報告書にみえる、主要都市、地方ごとの次の関税請負額からも窺うことができる⁽⁸⁾。

(単位：トマン)					
タブリーズ	235,000	ケルマンシャー	20,000	ボルージェルド	7,200
ギーラーン	100,000	アスタラーバード	19,300	ホラーサーン	7,000
テヘラン	41,000	カーシャーン	16,360	ケルマーン	7,000
ファールス	35,000	ハマダーン	11,000	ハムセ	3,200
イスファハーン	24,500	カズヴィーン	7,400	ゴルパーエガーン	1,700
				ギンジャーン・ビージャール	1,000

カージャール期においては1900年の関税改革が実施されるまでは、税関は政府の直轄でなく地主、商人、遊牧部族長など有力者に入札をさせて関税を一年

ごとに請負わせていた⁽⁹⁾。上に挙げた額は請負額であるから商品の出入りを正確に映しているとはいえないが、タブリーズは二位以下の都市を断然引き離しており、この町の商業都市としての繁栄ぶりを窺うことができる。

タブリーズの商業を支えていた人たちはエスニシティーからいうと、アゼルバイジャン地方の住民構成の特殊性を反映してトルコ系の方言であるアゼリーを喋る人たちが多かった。タブリーズ駐在のイギリス領事スチュワートは1890年9月16日付けの報告のなかで、アゼリーの言語的な特徴と商業との関係を大略、次のように述べている。すなわち、アゼリーは北に隣接する帝政ロシア領ザカフカスのトルコ系諸部族の使う言葉に似ているが、イスタンブルのトルコ語ともブハラ¹¹のトルコ方言であるウズベク語とも異なる言葉である。しかし、違うとはいえこれらの二つの言葉の中間的な方言という特徴が幸いしてトルコ系のアゼルバイジャン人はイスタンブルでもブハラでも意志を通じさせることができ、これが商人、輸送業者として仕事をするのに有利に作用していたという⁽¹⁰⁾。

以上のごとく言葉の点で他を圧していたトルコ系アゼルバイジャン人はその商才を遺憾なく発揮する機会に恵まれた。タブリーズ駐在イギリス領事＝ジョーンズは1873年度の報告のなかで次のように述べている。

「ペルシャ語を喋る人たちはアラブのように根っからの商人である。もっとも早い時期からこの人たちは東方世界で一目置かれてきたし、たくさんの特権を享受してきた。地元の商人が有する、ずるく油断のならないこの性格はこの地方（アゼルバイジャン）のトルコ人の方が本当のペルシャ語を喋る人たちよりもっときわだっているように思える。かれらは機をみるに敏で、その多くが国で責任ある高い地位を占めるヨーロッパ人の例に倣っていかにして債権者を罰せられずに騙すか、その手練手管を心得ている⁽¹¹⁾。」

トルコ系アゼルバイジャン人が大半を占めていたと思われるタブリーズの輸入商人は、タブリーズ＝ヨーロッパ間でもっとも重要な中継都市であったオスマ

ン朝の首都イスタンブルに一族の者、代理商、通信員を常駐させ、彼らの手を通じてヨーロッパ商品、とりわけイギリスの綿製品などの輸入をおこなっていた⁽¹²⁾。

トルコ系アゼルバイジャン人と並んで注目される商人はアルメニア人である。タブリーズはイラン国内ではイスファハーン、テヘランと並んでアルメニア人が多く住む町であった。1888年8月25日付けのタブリーズ領事アボットの報告によると、アルメニア人の数は4,000人を越えていた⁽¹³⁾。しかしながら、タブリーズ地つきのアルメニア人の商業活動は残念ながら史料にはあまり出てこない。むしろ最初の部分で紹介したジョーンズの報告に見られるように、ザカフカス在住のアルメニア商人、イスタンブルに居住するアルメニア商人の活動についての記録が断片的ではあるが残されている。彼らはイスタンブルというアルメニア人にとって最大の商業コロニーを拠点に、主としてイギリス綿製品のイラン向け再輸出に携わっていたが、この点については別に稿を改めて論じる予定なので、今は簡単な指摘だけにとどめておくことにしたい。

II

イランの輸出入貿易においてタブリーズの占める圧倒的優位がくずれてくるのは1860年代の後半になってからである。時代の前後関係からいうと、まず1867年に輸出の最重要商品であった生糸貿易が壊滅的な打撃をうけ、次いで1883年、帝政ロシアがザカフカス・ルートのフリー・トランジット政策を放棄すると、タブリーズに輸入される商品の量、額が減少した。これによって引きおこされた問題点を時間の順序は逆になるが論の関係上、まず輸入貿易から見えていくことにしよう。

ヨーロッパ商品のイランへの輸入ルートの第一は1820年代末に開設された「トラブゾン＝タブリーズ・ルート」であったが、1865年になって帝政ロシア

政府が、ザカフカスの中継貿易を振興すべくこの地域を通るヨーロッパ商品の関税を無税にする政策を断行するようになると、「ザカフカス・ルート」もトラブゾンからのルートとならぶイランへの輸入ルートとして賑わうようになった⁽¹⁴⁾。しかし、これは長くはつづかなかった。1883年、帝政ロシア政府が国内産業の保護を求めるモスクワの商工業者の声に押されてヨーロッパからの商品がザカフカスを通過することを禁じたからである⁽¹⁵⁾。

これによってヨーロッパ諸国、とりわけイギリスはイランへのルートの片翼をもがれることになった。以後、イギリスは1869年のスエズ運河開通以来盛んになっていた「ペルシャ湾ルート」に輸入ルートの重心を移すことになる⁽¹⁶⁾。この貿易ルートの変化によってタブリーズの輸入量は著しく減少した。しかし、それでも1887年度のイギリス領事報告によると、タブリーズの全輸入貿易額のうちイギリスが占める割合はまだ80%にも達していた⁽¹⁷⁾。

タブリーズの輸入貿易においてイギリスが相対的に後退すると、代わって帝政ロシアが重要な貿易相手国として登場してくることになる。イラン＝ロシア貿易は、トルコマンチャイ条約が締結された1828年以来、1860年代まではロシアからイランへの商品の流れは思ったより少なく、むしろイランの方がイギリス等から輸入した綿布を捺染してロシアに再輸出するという貿易構造上の特徴をもっていた⁽¹⁸⁾。しかし、1880年代にはいと綿工業を発展させたロシアは逆にイラン北部地方の市場に対して輸出攻勢に出るようになった。この動きはイランの綿製品市場を独占していたイギリスに脅威を与え、1888年、通商アタッシュェのローを团长とする特別の調査団がイランに派遣された⁽¹⁹⁾。輸入貿易をめぐるタブリーズの全般的状況はイギリスの独占体制が崩れ、ロシアの進出によってイギリスの足元が脅かされていたといえることができる。

以上のような輸入貿易の状況に対して、長らくタブリーズの輸出貿易で首位の座を占めていたのは生糸である。生糸貿易の推移については別に論ずるつもりなので、ここで詳しく触れることは避けるが、ただ1872年11月25日付のタブ

タブリーズの絨毯貿易

リーズ領事ジョーンズの報告に載せられている生糸の輸出統計—付表1を紹介しながら生糸貿易の変遷を簡単に見ておくことにしたい。

付表1 生糸の輸出統計 (単位: ポンド)

年	輸入総額	イギリス製品	輸出総額	生糸輸出	生糸総額/ 輸入総額	生糸輸出/ 輸出総額
1837	985,000	600,000	105,000	?	10.7%	?
1839	591,825	450,000	464,219	214,180	78.4	46.1
1844	703,204	562,000	369,057	131,418	52.5	35.6
1848	830,773	771,943	343,738	144,030	1.4	41.9
1850	882,175	762,003	607,128	236,434	68.8	38.9
1858	1,639,225	1,368,300	974,942	389,300	59.5	39.9
1859	1,786,488	1,518,207	965,140	409,582	54.0	42.4
1863	1,460,000	815,000	534,000	351,000	36.6	65.7
1864	1,800,000	1,575,000	600,000	<u>502,000</u>	33.3	<u>83.7</u>
1865	1,669,231	1,242,516	886,883	499,322	53.1	56.3
1866	1,699,712	1,107,441	516,626	374,400	<u>30.4</u>	72.5
1867	1,432,069	946,672	643,093	<u>65,000</u>	44.9	<u>10.1</u>
1868	1,351,005	1,017,285	683,885	80,000	50.6	11.7
1869	1,575,776	1,123,211	901,218	136,400	57.2	15.1
1870	1,094,717	864,000	422,632	116,000	38.6	27.4
1871	789,559	611,280	340,790	119,440	43.2	35.0

出所: Tabreez: Report by Consul General Jones, GBPP 1873 LXVII, p. 364.

この付表1によると、タブリーズから輸出された生糸の絶対額、全輸出品の額に占める生糸輸出額の割合が最高であった年は1864年である。それぞれ50万2,000ポンド、83.7%であった。しかるに3年後の1867年になると一転して生

糸の輸出額、輸出総額に占める生糸の割合が15年間の統計のなかで最低に落ち込み、各々6万5,000ポンド、10.1%になる。

このように急激に生糸貿易が衰退した原因は生糸の最大の産地＝ギーラーンで蚕の微粒死病（ペプリン）が発生し、生糸生産そのものが壊滅的な被害を受けたからである⁽²⁰⁾。この病害に対して種々の対策が講じられ⁽²¹⁾、1868年以降、徐々に生糸の生産と貿易は回復の兆しをみせるが、かつての水準を取り戻すことはできなかった。

元来、タブリーズの輸出入の貿易収支は入超、赤字という構造にあり、貿易差額の支払いにあてる正貨の国外流出が問題になっていたが、この生糸貿易の衰退によってタブリーズの輸出貿易はさらに一層、悪化した。この状況を打開するための輸出振興策が1872年頃からタブリーズにおいて出てくるが⁽²²⁾、次のタブリーズ領事アボットの、1878年6月29日付の報告は露土戦争の影響で貿易収支の歪みがさらに悪くなった状況をまことによく言いあてている。

「正貨の国外への連続した流出を含む、輸出にたいする輸入の超過はもっとも深刻な結果をひきおこす脅威になっている。ギーラーンの生糸の生産はこの事態を改善するのに何ら寄与していない。カスピ海地方は毎年、さほど生糸を産出していないようにみえる。1876年において産額は以前よりさらに悪化していると報告されている。この国の外国貿易の繁栄が生糸貿易のそれに依存していたのを思うとき、毎年、ヨーロッパから輸入している商品の半分の額を補填する、こちらから輸出するにふさわしい生産物がこの王朝にはないので、結論としてペルシャは破産に向っているとしか言いようがない。前に記述した最近の戦争（＝露土戦争）もこの傾向に拍車をかけているにちがいない⁽²³⁾。」

1872年から1884年の間、タブリーズのイギリス領事報告にはこの町から輸出されていた商品の統計が十分なかたちで載せられていない。それゆえ、断片的にしか輸出の趨勢を述べることができないが、次に掲げる付表2から1871—73

タブリーズの絨毯貿易

付表2 タブリーズの輸出貿易 (1871—73年度) (単位: ポンド)

品 目	1871	1872	1873	輸 出 先
生 糸	119,440	140,000	91,168	少量がマルセイユ。市場は厳しい。
屑 絹	……	2,000	538	主としてイギリス。
織 物				
絨 毯		28,000	24,576	ロシア, イギリス, ドイツ
捺 染 綿 布	62,928	65,000	119,440	トルコ, 南ロシア
シ ョ ール		50,000	57,600	ケルマーン, ヤスド産。スカーフのかたちで織られ, トルコ人, グルジャ人がウエストバンド, コートの裏地として使う。
絹 織 物		14,000	5,740	……
タ バ コ	31,466	110,000	54,444	シーラーズ産。トルコ, ロシア
綿 花	29,968	5,000	1,776	貧弱で短い繊維
木工製品・厚板	28,680	……	……	……
薬 種・染 料	20,384	17,300	29,427	ロシア, トルコ
乾 燥 果 物	13,668	45,000	28,644	ロシア, トルコ
毛皮製品・ 子羊, 羊皮	7,504	90,000	21,224	ロシア, トルコ, ドイツ
皮 草	5,552	2,500	30,272	ロシア, トルコ, ドイツ
蠟	1,200	1,200	1,378	ロシア, トルコ
羊 毛	……	4,000	4,256	西ヨーロッパ, 少量のサンプルがリバプール。
そ の 他	20,000	30,000	13,552	
総 計	340,790	634,000	530,997	

出所: GBPP 1875, LXXV, A & P 34 "Report by Consul-General Jones on the Trade and Commerce of Tabreez for the Year 1873." (March 31, 1874), p. 205.

年度においてタブリーズの主たる輸出商品のうち生糸は絶対額が減ったとはいえず、依然としてこの町の輸出貿易品の首位を占めていたことが理解される。

ところが、付表3の1878年度の輸出統計をみると、それまで首位を占めていた生糸が第三位に転落し、これに代わって絨毯がタブリーズから輸出される商

付表3 タブリーズの輸出貿易（1878年度）

品 目	額 (単位=ポンド)	輸 出 先
絨 毯	65,000	イギリス, フランス, ドイツ, ロシア, アメリカ
捺染線布	55,000	ペルシャの柄模様で捺染したマンチェスター綿布→グルジャ
生 糸	40,000	少量がマルセイユ
ショール	32,500	ケルマーン, ヤズド産, 主としてトルコ, ザカフカス
タバコ	28,085	シーラーズ産, トルコ, ロシア
乾燥果物	27,500	ロシア, トルコ
薬種・香料	20,000	ロシア, トルコ
羊 毛	7,430	西ヨーロッパ
絹製品	5,200	ケルマーン, ヤズド産, 主としてトルコ, ザブフカス
毛皮製品	4,880	狐, 子羊の毛皮, ロシア, ドイツ
蠟	4,690	トルコ, ロシア
染料	1,912	トルコ, ロシア
綿花	1,500	貧弱な短繊維, ロシア市場
皮革	1,200	ロシア, ドイツ
その他	3,200	
総 計	298,197	

出所：GBPP 1880, LXIII, A & P 34, “Report by Consul-General Abbott on the Trade and Commerce of the Province of Azerbaijan for the Year 1878—79.” p. 116.

品の首位に躍りでてきたことが分かる。1870年代の後半を迎えて、タブリーズの輸出貿易は生糸に代って絨毯に活路を見だし、これを切札にして輸出の再生をはかっていこうとしたのである。

III

絨毯は昔から材料である羊毛が豊富で、労働力のあるところならイランのどこでも織られてきた。とくに遊牧民のところで盛んであった。近代の遊牧民でいうとイラン東北部のトルコマン族、西北部アゼルバイジャン地方のトルコ系諸部族、西部のクルド族、中央部のバフティヤール族、南部のカシュガーイー族、東南部ケルマン近くで遊牧するアフシャール族等の地域が絨毯の産地として知られていた。

しかし、絨毯が自家消費、あるいはごく限られた王侯貴族のための奢侈的な装飾調度品という枠を越え、広く使われる商品としての需要が高まってくると、これら昔からの絨毯産地の他にいくつかの新しい産地が出現してきた。

ここではまず絨毯の商品価値が見なおされるようになった1870年代における絨毯の産地の状況について伝える、二人のタブリーズ駐在イギリス領事ジョーンズとアボットの報告を紹介しておくことにしよう。

ジョーンズは1873年度の報告のなかで「絨毯はイラン全域で織られているが、次の地域はその美しさ、織りの丈夫さによってとくに有名である。すなわち、ファラーハーン、ソルターナーバード（＝現アラク）、サラバンド、マシャッドとガウィーン（Gawin）近郊の諸村、クルディスタンのセンナとその近くの村、アゼルバイジャンのカラダーグ、ベクシャイーシュ（Bekshaish）、ヘリーズ（Heriz）の地区がそれである」⁽²⁴⁾という風に絨毯の産地を列挙したあと、各地域の絨毯の特色を説明する。アボットも1878年度の報告において同様の説明をおこなっている。以下においては重複を避けるため、ジョーンズ、アボッ

トそれぞれの報告を適宜、取捨選択しながら、産地と絨毯の特色とを整理しておくことにする。

① イラク地方・ファラーハーン地区

「ファラーハーン地区とソルターナーバード市はヨーロッパ，トルコに輸出される多量の絨毯を供給し，額は毎年，約50,000ポンドに達する。絨毯はここではとくにヨーロッパ向けにつくられ，サイズは2平方ヤードから14×10ヤードである⁽²⁵⁾。」

「サラバンドの絨毯は落ち着いた色合で，小さなデザインである。色と質はめだって丈夫である⁽²⁶⁾。」

「イラク州のファラーハーン地区はペルシャのどの地区よりも輸出用の絨毯をつくっている。それは一般に正方形のかたちをしているか，あるいは部屋の側面にぴったり合うように長めに，幅を狭くしてつくられている。いずれもファラーハーン地区のソルターナーバード（シェフレンウとも呼ばれる）とサラバンドにおいてつくられ，あらゆるサイズと質のものがあるが，デザインにおいてさほど変わりがない。極めつきの技術を駆使し，現地の人のすぐれた感覚にあう大きな絨毯もときたま，注文に応じてつくられる。

サラバンドの絨毯はその耐久性，小さなヘリが精巧に仕上げられていることに特徴がある。デザインは大半が松の葉である。長めに幅を狭くして織られたり，小さな敷物の場合もある。正方形はめったに見られないが，ヨーロッパ人の評価は高い。ファラーハーンの絨毯はタブリーズで平方ヤードにつき18シリングから1ポンド2シリングで売られている⁽²⁷⁾。」

② ホラーサーン地方

「ホラーサーンの絨毯（なかでもマシャッドで織られるものが最上）はデ

デザインの趣きと輝くような色にその特徴がある。しかし、丈夫さ、耐久性において先に触れた絨毯に及ばず、そのため地方市場では安い値で売られている⁽²⁸⁾。」

「ホラーサーンの絨毯はそのすぐれた品質、デザイン、染色の面で最高の評価を得ている。色合がベルギーの絨毯に似ており、きわめて明るく、鮮やかである。デザインはたいていの場合、さまざまな地に動植物を模して織られる。タブリーズにおける価格は平方ヤードにつき1ポンド5シリングから1ポンド10シリングのあいだである⁽²⁹⁾。」

③ クルディスターン地方・センナ

「センナの絨毯はもっとも鮮やかで、美しいが、サイズが小さいのでヨーロッパではテーブルカバー、あるいは炉辺の敷物として使われる。一般的に大きさは6×4フィートで、80-150フランで売られている。

センナの、パイルがなく裏返しにしても使える絨毯はそこで75-125フランで売られている。色は輝きがあって褪せず、品質は丈夫すぎるほどである⁽³⁰⁾。」

「イラン・クルディスタンのセンナの敷物、ソファー用の絨毯は質のすばらしさ、デザインの美しさでこれに勝るものはほとんどなく、それぞれ20ポンドもの値がつけられている。言い値は認めざるをえないのかもしれないが、64フィートの大きさにしては高すぎる値段である⁽³¹⁾。」

④ アゼルバイジャン地方

「カラダグの絨毯はケルマンシャーのそれに似て、長さがあり幅が狭い。染色と織りの質はよい。ベグシャイージュの絨毯は織りの耐久性に関して他のものと同じであるが、染色が悪く、すぐ褪せてしまう⁽³²⁾。」

「この地方についていうとベクシャイージュ、ヘリーズ、カラダグのハ

一ノムルードが注目しているところである。ベクシャイージュでは、丈夫であるが、粗悪な絨毯が織りはじめられており、他方、いちばも最後に挙げたハーノムルードの絨毯は見事なもので、センナでつくられる絨毯に似ている⁽³³⁾。」

⑤ トルコマーン地方

「トルコマン族の旧都であるサラフスから絨毯が最近、イランに輸入された。それらは織りにおいてすばらしいが、デザインが貧弱で、色合はきらびやかさに欠け、大抵は赤か黒で、ごちゃごちゃしたパターンでつくられている⁽³⁴⁾。」

これら五ヶ所の絨毯の産地のうち、⑤のトルコマーン地方は正式には1881年12月のロシア・イラン条約によって帝政ロシア領・トランスカスピアとイラン領・ホラーサーンとに分割されるが⁽³⁵⁾、1878年度の報告が書かれた時点においてすでに事実上、国境が確定しており、上の記事のごとく帝政ロシア領に編入されたトルコマーン地方から絨毯を輸入するようなこともあったのである。ただし、イラン領に残されたトルコマーン地方でも従前のごとく絨毯が織られていたことは改めて言うまでもない。

以上、産地に関する5つの記事の内容は絨毯の品質を決めるいくつかの要素、すなわち織り、デザイン、色合い、耐久性、サイズ（長さと同幅）、かたち、用途、平方ヤード当たりの価格、輸出額等多岐にわたっている。ここで言及されている5つの地域はむろん、産地のすべてではなかったが、絨毯交易が生糸交易に代って興隆しつつあったタブリーズに絨毯を供給する、主たる生産地であったことは間違いがない。

とくに①のフェラーハン地区は、他の産地が遊牧民等の絨毯づくりの伝統をふまえる昔からの産地であった面が強いのに対し、後述するようにもっぱら

ヨーロッパ市場に照準をあてた新興の、タイプのまったく異なる生産地であったことに注目しておきたい。

絨毯貿易が盛んになりはじめるのは史料によるかぎり1872年のことである。1870—71年の飢饉がようやく終わった頃で⁽³⁶⁾、羊の死亡で羊毛価格が跳ねあがり、絨毯の価格が高騰したにもかかわらず、国外での絨毯の需要が急速に伸びた年であった。このあたりの事情をタブリーズ駐在領事ジョーンズは次のように述べている。

「この貿易はだんだんと重要性を増してきている。最近の飢饉に際して羊の群が斃死し、羊毛価格が上がったにもかかわらず、絨毯、ショールのかたちでのペルシャの織物に対する需要は急速に増えてきている。ロシアがこれら製品の主な市場を提供しているが、かなりの量が西側にも送られている⁽³⁷⁾。」

1873年に開かれたウィーン博覧会はヨーロッパでイランの絨毯についての認識を深めさせ、輸出を促進した。カージャール朝政府は博覧会に出す絨毯を含むイランの商品に対して輸出関税を免除して助成に努めたが、博覧会主催国であったオーストリア政府も輸入関税を免じ、陸と海から送られてくる商品の輸送費を割引する措置をとった⁽³⁸⁾。

ウィーン博覧会を見越して絨毯の便乗値上げもあったが、1873年以降、絨毯の輸出は順調に伸び、タブリーズ領事ジョーンズが1875年に以下のように報告する状況が現われてきたのである。

「ペルシャ絨毯に対する需要は最近の2年間でかなり増加している。輸出はその間、2倍になった。タブリーズでは普通の品質の絨毯に対して支払われる値は1平方メートルあたり約20フランである。しかし、羊群が多数斃死したことによって羊毛価格が高騰し、またウィーン博覧会で予想される購買を見こして1873年の春、価格が約40%値上がりした。この貿易はだんだんと重要性を増してきている⁽³⁹⁾。」

1878年になると、前掲の付表3から明らかのように絨毯はタブリーズから輸出される商品のなかで第一位を占めるようになった。不振を続ける他の輸出品を尻目にヨーロッパ市場において唯一気を吐く商品になった。ヨーロッパ商人が買い付けのためにイランを訪れることも多くなった。タブリーズ領事アボットは1878年度の報告のなかで次のように述べている。

「ペルシャでつくられた主要商品はヨーロッパにおいてもはや手近に販路を見いだすことができない。その多くが駄目になっている。その商品というのはペルシャ・スグリ、木の実のかたちをした虫こぶ、アサフェティダ（褐色、油性のゴム樹脂）、ホラーサーンの羊毛、皮なめし工がすいたタブリーズ産の羊毛、ギーラーンの生糸、アヘン、ゴム、シーラーズのタバコ等である。それらはいずれも不振である。ケルマーンのショール、ヤズドの絹織物もたいして需要がない。利益を生みそうな唯一の輸出品は、この国の絨毯で、ヨーロッパ全域でたいそう評判になっている。この報告に付した輸出品リストによると、絨毯は65,000ポンドとなっているが、昨年はずいぶん15,000ポンドにすぎなかった。パリの Maison du Louvre の代理人が毎年、絨毯を買うためにペルシャに派遣されてきている。ヨーロッパ大陸の主要市場でかなりの需要があるのみならず、そこからアメリカにも輸出されている⁽⁴⁰⁾。」

IV

絨毯貿易が軌道にのりはじめる1872—73年頃は絨毯の生産においても転換期にあっていた。ヨーロッパ、アメリカ市場でイラン絨毯にたいする引き合いが増えるにつれ、絨毯の生産を近代化し、大量の需要に応えることが急務の課題になってきた。このような要請に応じて新たにイランの絨毯産業の中心として台頭してくるのが高原中央部に位置するソルターナーバードの町であった。

この町で興された絨毯の生産は経営と労働編成の仕方において、また輸出貿易のやり方においてそれまで行なわれてきた零細な絨毯の生産とはまったく趣を異にするものである。それはこの町で絨毯産業を興したのが外国系の商業資本＝チーグラール商会であったことに関係している。

チーグラール商会はもともとイギリスのマンチェスターに本店を置く輸出入業者であった。イランとの間の貿易に早くから携わり、最初、タブリーズに支店を出し、ここを拠点に主としてマンチェスターの綿製品をイランに売込み、代わりにギーラーンの生糸を輸出する貿易をおこなっていた⁽⁴¹⁾。

1860年代後半、生糸の輸出貿易が衰退すると、タブリーズで生糸貿易を営んでいた外国系の商会は手痛い被害をうけ、その多くが事務所を畳んで対イラン貿易から手を引いた。たとえばタブリーズでもっとも有力な外国系商会であったギリシャ系のラッリ商会は1871年、イラン貿易から撤退した⁽⁴²⁾。

しかし、同じ外国系の商会でもチーグラール商会はこの苦境の時期にあってあくまでもイランにふみとどまった。生糸に代わるイランからの輸出商品を模索しながらこの危機を乗り切ろうとしたのである。その結果、絨毯に活路を見だし、その生産と流通を近代化することによって経営の建直しをはかろうとしたのである。1874年前後のことであった。

このチーグラール商会がソルターンナーバードにおいて行なっていた絨毯生産、会社経営の詳細は史料的な制約から現段階では十分、明らかにすることができない⁽⁴³⁾。ただ、イスファハーン駐在のイギリス領事＝プリースが残した本国への報告書は今の段階できわめて有益な情報を提供していると思われるので、以下、これにもとづきながらソルターンナーバードにおける絨毯生産、経営についてみていくことにしたい。

プリースは1893年10月24日から12月8日まで、任地のイスファハーン領事館周辺の諸地域、すなわちヤズド、ケルマーン、シーラーズ、ソルターンナーバード、カーシャーン等を広く旅行し、これら地域の経済事情を克明に記録した。

これは数多ある領事報告のなかでも秀逸のものと言ってよく、とくにケルマーン、ソルターナーバードの絨毯事情について役立つ情報が多い。

イスファハーンを出発したプリースは、ソルターナーバードに11月23日に到着した。この時、彼はこの町における絨毯産業が興されたそもそもの事情を次のように書きしるしている。

「約20年ほど前(=1874頃)、タブリーズ、テヘラン、イスファハーンに支店を出しているマンチェスターのチーグラマー商会は、イランからの輸出品が彼らの投資した資本をマンチェスターに還流させるのに十分な手段にならないこと気がつき、彼らの資本を使う別な方法を探した結果、この絨毯貿易を発展させることを考えつくにいたった。タブリーズにいる社員の一人アルピガー(Alpiger)氏はこれを任されて難題に取り組んだ。かれの静かななかに秘められた不撓不屈の精神、決して挫けることのない勇氣とによって絨毯貿易は重要なものとなった。政府からは何の援助もうけず、またいかなる特権もなかった。多大の困難、地元商人、取引業者から多くの反対があったにもかかわらず、ひたすら真摯な仕事ぶりと勤勉さで少しづつ事業を軌道にのせていき、今やイランでこれに匹敵するものはない(44)。」

このような記事につづけてプリースは、到着した翌日、マンチェスターからソルターナーバードに着いたばかりのチーグラマー商会の社員が天然痘で亡くなり、そのごたごたで満足のいく情報をとれなかったと弁解しながらさらに詳しい報告を載せている。しかし、それらをすべてここで引用するには紙幅に余裕がないので、以下、かいつまんでソルターナーバードの絨毯産業について述べていくことにする。

ソルターナーバードは、古くから絨毯の産地として知られるファラーハーンの南20マイルに位置する新興の町であった。プリースが訪れた当時、戸数8,000、人口は35,000人であった。40のマハッレに分れ、16のカナート、11の

マスジド、1つのマドラセ、30のハンマーム、21のキャラバンサライを数えるかなりの都市であった。カージャー朝のイラク州政府に毎年、35,000トマンの税を納めていた。

この町の郊外にチーグラール商会は6,000ポンドを投じて40,000平方ヤードに及ぶ広大な敷地に絨毯を織る建物群を建設した。それは社員の住居、事務所、倉庫、染色室からなっており、あまりに大きかったためにソルターナーバードの住民は、これを「カルエ」と呼んでいたという。倉庫にはありとあらゆる、鮮やかな色の染色した羊毛がしまわれていた。

チーグラール商会のマネージャーであるアルビガーがプリースに語ったところによると、20年前にタブリーズからソルターナーバードに来た頃は、町には40台の機があるにすぎなかった。しかし、1893年になると、チーグラール商会が経営する工場の機の台数を入れると、町全体で少なく見積もっても1,200台、近郊の村まで数えると、1,500台、ソルターナーバード地方全域でかれこれ3,000台の機があったという。これらの機によって織られる絨毯の年間の生産額は5,000,000ケラーンに達し、なかでもこの町の絨毯産業の中核をなしていたのがチーグラール商会が経営する絨毯工場であったのである。

この工場の絨毯の生産工程の特徴は多数の婦女子を雇い、統一した規格のマニュアルにしたがって絨毯を機で織らせるという工場制的な仕組みにあった。織り子である婦女子は、主として羊毛からつくられた糸を渡され、幅21インチ(=イランの半ヤード)の間隔で機の前に座らせられ、専属の図案師が描いた、サイズを指定してある模様図にしたがって作業をすすめていった⁽⁴⁵⁾。

材料のなかでもっとも重要な横糸として使われる羊毛糸は、ソルターナーバードの南にある中都市ゴルパーエガンからもってこられていた。プリースはイスファハーンからソルターナーバードに来る途中、11月18日にゴルパーエガンに立ち寄っているが、それによるとこの町は、5,000戸、2万人の人口を数え、この地方最大の羊毛の集散地として知られていた。羊毛はそこで撈り糸

にされたあと、ソルターナーバードに送られてきていたのである。縦糸に使われる綿の縫り糸の方はソルターナーバードの西にある都市＝カーシャーンからもってこられていた⁽⁴⁶⁾。

工場で働く婦女子の仕事のスピードは腕のいい者で、一日でディエムにつき約5インチ織り進むことができ、長さ20フィートの絨毯を完成するのに約二ヶ月を要した。織り上がると、渡された図柄に忠実で、マニュアル通りであるかどうかが検査され、よくできていれば僅かな報奨金が与えられ、間違っている場合はペナルティーを課された。賃金は織り子の熟練度によって異なるが、週給2—3ケラーンを支給されていた⁽⁴⁷⁾。

ソルターナーバードにおいて絨毯工場を経営していたのはチーグラール商会だけでなかった。この商会に遅れること10年、すなわち1884年頃にオランダに本社があり、ロンドン、ブージュエル、イスファハーンに支店を開いていたホッツ商会もこの町に進出し、絨毯産業に手を染めるようになった。染色のための自前の作業場をもち、絨毯貿易に熟知する若い社員を配し、後発ながらチーグラール商会のよき競争相手であった⁽⁴⁸⁾。このヨーロッパ系の二大商会の他にユダヤ人を含む地元の絨毯取引業者、商人も問屋制的な、小規模な絨毯工場を営んでいたようだが、ブリースはこれについてとくに詳しい報告をしていない⁽⁴⁹⁾。

以上のごとく大小さまざまな絨毯工場ができたことによって、ソルターナーバードはイランにおける最大の絨毯の生産地になった。これによって町はブリースが以下のごとく記すような空前の繁栄を呈するようになった。

「イランの町でソルターナーバードほど豊かな町を見たことがない。人びとの立ち居振る舞いはすばらしく、みな良いみなりをして、満足し幸福そうに見える。みな絨毯を織ることで生活している。ソルターナーバードほど私に良い印象を残した町はない⁽⁵⁰⁾。」

ソルターナーバードの絨毯産業は市部とその郊外だけでなく、キャラバンで

二日行程の距離にある近隣の村々にも波及していた。プリースによると、全部で800戸に達するソルターンナード地方の村々にあわせて1,200台の機があったことが報告されている⁽⁵¹⁾。

プリースはソルターンナードの町に入る前、さらに出発してから以下のとき村々で実際に絨毯が織られる状況を目撃している。きわめて興味ある事実が記載されているのでこれを簡略なかたちで列挙してみることにする。

① 1893年11月22日（ソルターンナードに入る一日前）

ヴァルチェ・バーラー村（Warcheh Bala）

50頭の耕作用の牛を所有し、年に65,000lbs.の麦を播種する。600トマンを納税し、100戸、500人の村である。カージャール朝の王族サラーム・オッドウレの所領。ここに住むアルメニア人は自分たちのために絨毯を織るが、イラン人はソルターンナードにあるヨーロッパの絨毯会社のために絨毯を織っている⁽⁵²⁾。

② 1893年11月22日（ソルターンナードに入る一日前）

グイーリー村（Guili）

30頭の牛がおり、年に52,000lbs.を播種する。150トマンを納税し、別に2,700lbs.の穀物を現物税として納める。カージャール朝の王族サラーム・オッドウレの所領。60戸、500人が住み、1,000頭の羊がいる。村には約25台の機があり、絨毯は優雅さ、サイズ、色の純正さ、羊毛のすばらしさによって有名である⁽⁵³⁾。

③ 1893年12月2日（ソルターンナードを出てから一日行程）

インジェダーン村（injedan）

農民所有の村。70対の耕作用の牛がおり、年に72,000lbs.を播種する。200トマンを納税し、別に軍役免除の税として150トマンを払っている。300戸、1,600人。250台の絨毯を織る機があり、赤い染料で有名である⁽⁵⁴⁾。

④ 1893年12月4日（ソルターナーバードから二日行程）

チェナル村（Chenar）

農民所有の村。年に18,200lbs. を播種し、150トマンを納税している。80戸、350人。約20台の機がある⁽⁵⁵⁾。

⑤ 1893年12月4日（ソルターナーバードから二日行程）

ホメイン地区にある村。30対の耕作用の牛がおり、年に39,000lbs. の播種をしている。現金300トマンと20ハルヴァルの穀物を税として納めている。150戸、550人。30台の織機がある⁽⁵⁶⁾。

以上のようにソルターナーバード市とその近郊農村の絨毯産業はヨーロッパ、アメリカ市場向けの大量生産によって確かに繁栄した。しかしながら、他方において古き良き伝統技術がそこなわれ、質が低下したことも否定できなかった。とくに染色においてこれが著しかったと言われている。化学染料であるアニリンが輸入されるようになると、色そのものがげげげしく、目障りになった。また色の定着も悪くなり、すぐに褪せてしまう絨毯が多くなった⁽⁵⁷⁾。化学染料はアニリンの他、ドイツでつくられたインディゴのまがい物で、「プロシヤ・ブルー」と呼ばれる染料も輸入されていた。これがソルターナーバードの絨毯に使われ、絨毯の質を落とす元凶になっていたのである⁽⁵⁸⁾。

こうした化学染料の弊害を避けるため、カージャール朝政府はアニリン染料の輸入を禁止した。しかし、この染料の流入は止まなかった。バグダードから砂糖の箱に隠して運びこまれたり、またザカフカスからは石油のブリキ罐に入られたりして密輸があとを断たなかったといわれている⁽⁵⁹⁾。

柄模様でも問題が生じていた。トルコマーンの絨毯、クルディスターンのセンナの敷物に象徴される、美的感覚の極致とも言える東洋風のデザインが捨てられ、マンチェスターのプリント地からヒントを得て華美ながら醜悪なデザインを真似て織る絨毯が増えてきた。これによってイランの絨毯はかえってヨーロッパ市場で人気を落とすことになり、国内、あるいはトルコ市場でしか販路

を見つけれない、という皮肉な結果を引き起こすことになった⁽⁶⁰⁾。

ソルターナーバードで織られた絨毯の輸出ルートは、当初、タブリーズを経由し、そこからザカフカス・ルート、タブリーズ＝トラブゾン・ルートを使ってヨーロッパ方面に送り出すというものであった。しかし、ソルターナーバードからタブリーズまでは距離が遠く、不便なため、輸送時間、運送費を軽減できるルートが探し求められた。

この結果、ソルターナーバードから南に行き、ゴルパーエガーン、イスファハーン、シラズを経由してペルシャ湾に抜けるルートが頻繁に利用されるようになってきた。しかし、このルートもペルシャ湾の港ブーシェルまでキャラバンで50日かかり、輸送賃も梱につき約70ケラーンを支出しなければならなかった⁽⁶¹⁾ので、必ずしも最上のルートとは言えなかった。

より短く、より安く絨毯をペルシャ湾まで運ぶため別なルートが開拓されなければならなかった。このためソルターナーバードから西南へ行き、ボルージェルド、ホッラムアーバード、ディーズフルを経由してシェースタルに至り、ここからカールーン河を下ってペルシャ湾に出る最短ルートが構想された。しかし、このルートも途中、ロル族、遊牧アラブの襲撃にさらされる危険があり、税関での煩雑な手続きもあつたりして、結局、プリースの報告によると1897年においてもなお、絨毯の輸出ルートとして利用されることはなかったのである⁽⁶²⁾。ソルターナーバードの絨毯の多くは従前どおり、タブリーズを経由して国外に輸出されていた。

V

ソルターナーバードの絨毯産業は、イラン絨毯に対するヨーロッパ市場の需要の増大、それともなう取引の活況によって発展した。しかし、1890年代後半になると、ソルターナーバードにおける絨毯の生産は需要に追いつかなくな

り、この結果、価格が高騰し、質が低下するという問題が生じてきた。このような状況を打開するため、ソルターナーバードに集中していた絨毯生産の在り方を改め、絨毯産業を他の地域でも興していく必要がヨーロッパ人によって、またイラン人によっても痛感されるようになってきた。この辺りの事情をイスファハーン駐在のイギリス領事ブリースは1896年度の報告で次のように述べている。

「絨毯の取引は国内においても、フランス、アメリカにおいても非常な活況を呈している。イラン絨毯の需要は高いので、この絨毯貿易がさらに一層、発展することを期待する。しかし、今や実際にはソルターナーバードの機は目いっぱい稼働していて、その生産は限度ぎりぎりに近い。ソルターナーバード以外にも開発可能で、貿易を行なえばソルターナーバードの水準に達すると思われる絨毯の産地がある。たとえば、ボルージェルドの近郊、ケルマーンがそれである。前に提出した報告のなかで後者の可能性について詳しく触れておいた。最近、ロンドンで「イラン絨毯製造会社」が営業を開始した。この会社がその力の一部をソルターナーバード以外の絨毯の産地に振り向け、ソルターナーバードとだけ取引を集中せぬよう望むものである。集中すると、結局、価格が高騰するか、さもなければ絨毯の製造において質が低下し、生産全体がじり貧になるかのいずれかである⁽⁶³⁾。」

新しい絨毯産地の開拓に熱心であったブリースは、これより2年前に書かれた1894年度のイスファハーンの領事報告のなかで、ソルターナーバードに刺激されて絨毯の生産がこの町に近い二つの地域で盛んになったと指摘する。第一の地域はイスファハーンであった。彼によると、1893年から一人の親方が極上の絨毯を織りはじめるようになった。10台の機のうち6台を羊毛と綿の絨毯を織るために使い、残り4台を絹の絨毯を織るために使ったが、評判がよいため機の台数をさらに2倍に増やすことを考えていたという⁽⁶⁴⁾。

第二の地域はソルターナーバードの南，ザクロス山脈の丘陵地帯で遊牧生活をおくるバフティヤリー族の居住地域であった。この地域は，材料の点で絨毯を織るのにきわめて恵まれた条件にあった。放牧された多数の羊から毛を簡単に刈り取ることができ，丘陵地からは自生する染料を容易に手に入れることができたからである。しかし，織られた絨毯は柄模様があまりに素朴すぎて商品として出すには今一つ物足りなかった。ただ，バフティヤリー族の遊牧民のうち定住生活に移った人びとが多く住むチャハールマハルの村では絨毯の改良にことのほか熱心で，デザインに工夫をこらせば遊牧民が織る絨毯としてもっとも質の高いことで知られるカンシュガーイの絨毯に勝るとも劣らないものを織ることができたという⁽⁶⁵⁾。

プリースが新しい絨毯の産地として期待するところは上に挙げた地域にとどまらなかった。彼によると，これらの諸地域をはるかに凌ぐ有望な絨毯の生産地として東南部の都市ケルマーンを挙げている。彼は1892，93年度の報告のなかで絨毯産業が盛んになる直前のケルマーンの状態について詳細に述べているが，以下，これをかいつまんで紹介しておくことにしたい。

ケルマーンの内市には絨毯を織る6人の有名な親方がいた。彼らの仕事場にはかなりの数の機が据え置かれており，全部で約50台の機があった。しかし，これに対して一台の機で絨毯を織る零細な織り子が主として町の周縁部で仕事をしており，彼らが所有する機の数には100台にもものぼっていた。

羊毛の絨毯が織られる場合，イギリス，あるいはインドのボンベイから輸入された木綿の縫り糸を縦糸に使い，横糸はケルマーンの羊，山羊の毛，また「コルク」と呼ばれる早春に刈る子羊，子山羊の柔毛を使っていた。絹の絨毯の場合，縦横の糸とも絹であったが，絹の絨毯，敷物は高価なため需要が少なく，注文に応じて織ることにしていた。サイズは小型が好まれ，普通の大きさは6.5×4フィート，値段は4ポンド，極上のもので75ポンドした。かたちは概して正方形が多く，郡部や遊牧民のところで織る絨毯はかたちの歪むものが少

なくなかった。これは機の置き方が違うことに原因があった。市内で織る絨毯は機を上下、垂直に置いたため織り上がりがよくなるのに対し、郡部、遊牧民のところで織る絨毯は機を水平に据えつけるためどうしても歪みが生ずるのであった。

ケルマーンでの絨毯仕事は性別は分らないが、4才から14才までの子供によって行なわれていた。彼らは工房内でソルターナーバードにおいてと同じく半ヤードごとの間隔で配置され、ハリーファと呼ばれる大人、あるいは16才ほどの若者の監督のもと、渡された下絵にしたがい、色と糸の数についての指示を受けながら絨毯を織っていた。賃金は監督の場合、日給10シャーヒー、子供は初年度10ケラーン、二年目が2トマン、三年目が3トマンであった⁽⁶⁶⁾。

以上のように細かく機の数、羊毛、綿糸の供給先、サイズ、かたち、価格、労働編成について書きしるすブリースは、さらにこのようにしてつくられたケルマーンの絨毯がどのように取引され、輸出されていたかについても貴重な記事を残している。それによると1890年代の前半までは絨毯の取引量は少なく、売買が行なわれる範囲は主としてケルマーン地方に限られていた。一部は知事からカージャール朝のシャー、サドラザム、貴顕、友人に贈り物として贈られた。輸出に回されるのはごく僅かで、イスタンブルからトルコ人が絨毯を買い付けに来ることもあったが、主たる輸出先はインド亜大陸のボンベイ、パンジャブであった⁽⁶⁷⁾。

ケルマーンの絨毯がインド方面に販路をもっていたのは、ここに300人ばかりのインドから来ている商人のコロニーがつくられていたからである。この事情をブリースは次のごとく記している。

「ケルマーンには小さいけれども重要なコロニーがあり、ここに英領インドの臣民が住んでいる。この地の主たる外国貿易は彼らの手にある。彼らは主としてシカルポール (Shikarpore) から来ている。かれらのうち17人が私 (=ブリース) を表敬訪問するためにやって来た。かれらの語るところによれば、彼

らの数は全部で25家族にのぼるといふ。彼らはシンド、パンジャーブ、ボンベイに駐在商人を置き、これらの地域と輸出入貿易を行なっている。彼らはまたケルマーン州全域に友人、駐在商人、代理商を置き、イギリス領バルーチスタンの国境にまで及んでいる。要するに彼らは約300人にのぼる商人である⁽⁶⁸⁾。」

ところが、20世紀に入るとケルマーンの絨毯は地方市場で流通する商品から脱して国際的な市場に出回る重要商品に転換した。このことは1904年、イギリス商務省から派遣されてイランの商業調査を行なったマクリーンの特別調査報告書から確かめることができる。これによると、ケルマーンの絨毯はタブリーズを中継地とするか、ペルシャ湾のバンダルアッパースから積み出されるかしながら、その大半がオスマン朝の首都イスタンブルに集められ、ここを中継取引の拠点としながらさらにヨーロッパ、アメリカ方面に送られるまでになっていた。イスタンブルではケルマーンのもものがイラン絨毯のなかでもっとも値が高くもてはやされていたといふ⁽⁸⁹⁾。

ケルマーンと並んで絨毯の生産都市として急成長してくるもう一つの町は、タブリーズである。この町はすでに述べてきたところから明らかなようにイラン随一の交易都市であったが、世界各地からの絨毯の引き合いが増すにつれ、イランの各地域から絨毯を集荷するだけにとどまらず、絨毯の有力な生産地としても名乗りをあげるようになってきたのである。この町の絨毯産業の勃興はケルマーンより少し早く、19世紀もおしつまった1895年頃のことと考えられる。次のタブリーズ領事（1898年度）の報告によってこの辺りのことを明らかにしておこう。

「最近までペルシャ絨毯と敷物に対する需要は高く、高い値がつけられていたが、これによってタブリーズの住民は3年ほど前から機でもって絨毯を織りはじめるようになった。現金収入をもたらすこの新規の仕事は大きな割合を占めるようになり、昨年の初めまでこれにすべてかかりっきりという状態であった。どの家でも店でも一台や二台の機を備えていない所は

なかった。その理由は絨毯を織る職人たちが現金を手にし、貧しい階層の人びと、主として少年たちが仕事にありつけるようになったからである。他方、ずっと長い間、この町をおおっていた生活に追いつまれた状況は親が子供に助けられ、不景気をしのぐことができたということによっていくらか和らいだ。タブリーズ絨毯の質は絹であろうと羊毛であろうと確かによい。しかし、織り手が十分に経験をつんでいないため、ソルターナーバード、ケルマーン、ホラーサーン、クルディスタンの同業の職人がするのと同じような正確さで仕事をすることができない。タブリーズの絨毯のスタイルと質とは評価の高いケルマーンでつくられるものによく似ている。(タブリーズ) 地方でつくられる(絨毯)商品の主たる欠点を挙げるならば、わずかながらシンメトリーに欠けることである。これは時がたてば改善される欠点にすぎない。経験さえ積みればタブリーズがペルシャにおいて重要な絨毯産地の一つになることはほとんど疑いがない⁽⁷⁰⁾。」

タブリーズの絨毯産業には外資系の商會が経営する二つの絨毯工場と地元の問屋制商業資本によるものがあつたが、前者はソルターナーバードほど規模が大きくなかつた。これを1898年度、1900年度のタブリーズ領事報告、1904年のマククリーン特別商業調査団報告書によって見てみることにしよう。

まず、外資系ではロシア国籍をもつ商人が200台の機を置き、2,000人にのぼる成人男性、少年を雇つて絨毯工場を経営していた。次いでイギリスの商會も20台の機を入れてロシア商人のそれに比べるとはるかに小さいが、絨毯工場をつくつていた⁽⁷¹⁾。

この工場で織られる絨毯の特徴は羊毛を本国のイギリスから直接、輸入していることであつた。こうするとイラン産の羊毛より質のよい羊毛が使われるため、絨毯の品質が良くなり、収益性が高くなつた⁽⁷²⁾。しかし、羊毛の輸入価格が高かつたため、結果として生産価格が上がり、まもなくイギリスからの羊毛の輸入はやめられた⁽⁷³⁾。一般にタブリーズの絨毯に使われる羊毛はアゼル

バイジャンのホイ、ウルミア、サーウージブラークから調達されていた。しかし、これらの毛の質は堅いため、結果として出来上がってくるタブリーズの絨毯は折り曲げにくいものになった⁽⁷⁴⁾。

タブリーズの絨毯工場で使われていた労働力は、ソルターナーバードが婦女子を雇っていたのと異なり、年の頃8才から12才までの少年であった。彼らを監督し、指導するのは12—14才の職長であった⁽⁷⁵⁾。これはすでに触れたケルマーンの例に近いものである。このような少年労働力の作業効率率はマクリーンによると、絨毯の柄模様にもよるが、9×12フィート、平方インチあたり15×15の編目のある平均的な絨毯を織る場合、5人の少年と一人の監督とが組になって月に18平方フィートは織りあげることができたという。これら少年の織り子に対して与えられる賃金は月に12ケラーン、監督者は50ケラーン、これに昼代として12ケラーンが加算された⁽⁷⁶⁾。

ところで、タブリーズの絨毯の大半は以上のような近代的な工場から生み出されるものだけではなかった。むしろタブリーズ地つきの商人が出す資金と指示にもとづきながら織り子の家で、あるいは零細な工場で織られる絨毯がその大部分を占めていた。これら民族系の商人の多くは、あらかじめ染色した羊毛の糸と柄模様の書いてある下絵を用意し、前渡し金を織り子に渡して絨毯を織らせ、完成した後、残余の金を織り子に改めて渡すという方法をとっていた。このやり方は直接、織る現場に経営者である商人がいないためいくつかの弊害をともなったといわれる。マクリーンによると、狡猾な織り子だと商人から渡された質のよい羊毛を売り払い、代わりに質の劣る羊毛を購入して利鞘を稼ぎ、商人にはそ知らぬ顔をして絨毯を納めることをしていたという⁽⁷⁷⁾。

これら問屋制資本的な絨毯の生産はタブリーズにおいて多様な形態をとっていたと思われるが、商人の中には工場のかたちをとってかなり手広く、絨毯の製造に関わるものもいた。タブリーズ出身の著名な歴史家、思想家であるアフマッド・キャスラヴィーの自伝を読むと、このような問屋制資本的な商人が経

営する絨毯工場の具体像を見つけることができる。

それはキャスラヴィー自身の父親の例である。かれの父親はタブリーズのホクマーヴァル地区に生まれた。家は代々、モッラーを出す宗教者の家柄であったが、キャスラヴィーの父親はモッラーになることを嫌い、若くしてバーザールに出て、商人としての修業をつんだ。

キャスラヴィーの父が青少年時代を過ごした19世紀末のタブリーズは、時あたかも町全体が絨毯ブームで沸きかえっており、資本を有する商人は前貸し金を惜しみなく出して競って近郊の農民等に絨毯を織らせていた。

こうした絨毯景気を横目で見っていたキャスラヴィーの父親は、ついに意を決して自ら絨毯工場をつくり、その経営に乗り出していくことになった。資金は従兄弟のハーッジー・ミール・アガーと折半で出し、工場が設立された。

この工場は利益追求一辺倒というわけではなく、『自伝』によると、慈善福祉的な理念にもとづきながら経営がおこなわれたという。たとえば、労働条件が他の絨毯工場よりいくらか緩く、仕事は日没の1時間から2時間前に終わるようにし、織り子に対して賃金のほかに昼食をつけていた。さらに注意すべきは孤児となっていた少年を積極的に雇用していたことである。このことはすでに紹介したイギリスの領事報告にタブリーズの絨毯を織る労働力が少年たちによって支えられていた、とあることと重ねあわせてみれば、当時のタブリーズにおける少年労働力の内実がさらに一層、明らかになってくるはずである。

キャスラヴィーの父親が経営する工場で織られた絨毯は国外輸出に向けられたが、この際、絨毯はタブリーズからオスマン朝の首都イスタンブルにもっていかれ、ここで中継の卸売り取引がおこなわれた後、ヨーロッパ、アメリカ方面に再輸出される流通の構造をとっていたことに注目しておかなければならない。

タブリーズの絨毯の生産と流通とがこのようにイスタンブルを通じて世界市場とつながっていたことは、当時の国際経済の景気の動向にタブリーズの絨毯

産業が常に左右されていたことを意味していた。『自伝』によると、1902年、ヨーロッパで起きた不況はイスタンブルにすぐに波及し、ここの倉庫に保管されていたタブリーズの絨毯は買い手がつかずに一年間、放置されたままであったことが伝えられている⁽⁷⁸⁾。

VI

タブリーズの輸出貿易にとって絨毯は、1860年代に衰退した生糸貿易に代わって登場してきたもっとも重要な商品であった。この絨毯を最初に商品として見直し、大量にイラン国内において生産し、外国で売り捌こうとしたのはすでに述べたようにイギリスのチーグラマー商会であった。マンチェスターに本店を置くこの商会は、イランではタブリーズに支店を出しながら生糸を中心に輸出貿易を盛んにおこなっていた。

しかし、蚕の微粒子病によって生糸貿易が壊滅的な打撃を蒙ると、チーグラマー商会は生糸貿易に見切りをつけ、いち早く絨毯の輸出商品としての価値に着目しこれの大量生産と国外向け輸出とに転換した。この商会は1870年代になると、イラク州のファーラーハーン地方の一都市ソルターンナードに当時としては画期的な、規模の大きい絨毯工場をつくり、ここを生産の拠点にして絨毯を織らせるということを盛んにおこなうようになった。出来上がった絨毯はイランのいくつかの中継都市—タブリーズ、イスファハーン等—to集められ、これらの都市から延びる交易ネットワークを使って外国の市場に送られるようになった。

チーグラマー商会、ホッツ商会のような外国系の商業資本によって先鞭をつけられた商品としての絨毯の生産と流通とのシステムは、19世紀末になると、イラン土着の商業資本によっても組織的におこなわれるようになってきた。かれらは伝統的な手工業生産の段階にとどまっていた絨毯生産の掘り起こしを積極

的にはかり、これを近代的な流通にも堪えうるものに再編しようとした。この結果、イランにはソルターナーバードに加えて、タブリーズ、ケルマーン、カーシャーン、ヤズド、ホラーサーン、クルディスタンなどの絨毯の産地が近代になって勃興してくることになる⁽⁷⁹⁾。これらのなかでイランの民族系商人の間屋制的な生産の枠組みのなかにもっともよく取り込まれることになったのが、すでに述べたようケルマーンとタブリーズの二都市であった。

以上が今まで論じてきたイラン国内における絨毯をめぐる生産と流通とをめぐる諸側面の概要である。最後にこれら絨毯が国外に輸出される際の交易ネットワークの問題を簡単に触れておくことにしたい。

イランで織られた絨毯は主として次の三つのルート、すなわち 1) ペルシャ湾ルート、2) ザカフカス・ルート、3) トラブゾン＝タブリーズ・ルートを使って外国に輸出されていた。このうち 1) のペルシャ湾ルートはブーシェル、バンドル・アッパースを積み出し港とし、ソルターナーバード、ケルマーン等の産地から直接、ヨーロッパ、アメリカ市場に輸出される場合に利用されることが多かったが、貿易輸出額からすると全体で占める割合は少なかった。絨毯

付表 4 イランの絨毯輸出額 (単位：ケラーン)

年 度	全輸出額	ロ シ ア	オスマン朝	アメリカ	イギリス
1907—08 (1325—26A. SH)	29,283,911	6,948,632 (23.7%)	19,893,913 (67.9%)	—	360,410 (1.2%)
1908—09 (1326—27)	39,498,837	8,502,910 (46.8%)	19,463,826 (49.3%)	493,690 (1.2%)	674,394 (1.7%)
1909—10 (1327—28)	48,416,559 ^a	20,901,980 (43.4%)	22,360,623 (46.2%)	2,136,022 (4.4%)	4,633,346 (9.6%)
1910—11 (1328—29)	45,138,356	19,128,276 (42.4%)	18,027,765 (39.9%)	4,633,346 (10.3%)	2,081,470 (4.6%)

出所：Muhammad 'Ali Jamalzadīh, Ganj-i Shayigan, Tehran, 1362 SH., p. 20.

の大半は 2) と 3) の北方ルートを使って輸出されていたのである。

このことは絨毯の輸出統計から明らかで、試みにジャマールザーデが作成した立憲革命期における統計(付表4)を挙げて、この点を確認しておこう。

この輸出統計は今世紀初頭の4年間を扱うにすぎず、不十分のそしりを免れないが、それにもかかわらずイランから国外に輸出される絨毯がどこに向うのか、おおよその趨勢を知るのに便利なものである。なお、括弧でくくった百分比は筆者自身が計算して出したものである。

これによると、イラン絨毯が最大の需要国の一つであったアメリカ、イギリスに直接、輸出される割合はきわめて少なかった。もっとも輸出の多かった1910—11年でも14.9%にすぎなかったことが分かる。大半の絨毯は、アメリカ、イギリス等のヨーロッパ諸国に輸出される場合でも、まずイランに隣接するロシア、オスマン朝に輸出され、しかる後にオデッサ、イスタンブル等の都市から再輸出されるという中継貿易の構造を取っていたのである。

この中継貿易のネットワークのなかでイスタンブルが果たす役割は大きかった。それはジャマールザーデがその著『莫大な富 (Ganj-i Shayigan)』のなかで「イスタンブルにはイランの絨毯を多量に取引する市場があり、毎年、ここからたくさんの絨毯がヨーロッパ、アメリカに送られる⁽⁸⁰⁾。」と記す段にすべてが言い尽されている。イスタンブルはイラン最大の絨毯の集荷地であるタブリーズ、帝政ロシア領内のザカフカス諸都市、オスマン朝領内のエルズルム、トラブゾン等の都市と緊密なネットワークでつながっており、イランの絨毯はこれら中継貿易の都市ネットワーク、その総元締めともいふべきイスタンブルを通じて国外に輸出されるのを常としていたのである。

イスタンブルがこのように絨毯の中継貿易において重要性をもっていたことは、この町に在住するイラン人の絨毯卸売り業者の数の多さにあらわれていた。右に引用する表は1330年(1914/15)にイスタンブル市庁が調査した民族、業種別の卸売商会数の統計である。これから明らかのように、絨毯を除く他の業

種ではトルコ人 (T), ユダヤ人 (M), アルメニア人 (E), ギリシャ人 (R), 外国人 (外) がイスタンブールの卸売業者として活躍しているのに対し, 絨毯だけは例外的に卸売り業者の総数194のうち, イラン人 (I) がもっとも多い47を数え, 百分比に直して33%強を占め, この町がイラン人の商人によって重視

付表5 イスタンブールの卸売り商会数

業種 (トルコ語)	業種 (日本語)	T	I	M	E	R	外	合計
elbise magazeleri	衣服商	18	0	19	23	54	5	111
moda ve mensucat	ファッション・織物商	78	0	27	30	46	11	192
tuhafiye	アクセサリ-商	60	0	72	144	114	8	398
kristal-i cam ve ayna	ガラス器・鏡	11	0	28	1	12	6	58
mobilya ve mefuruşat	家具・敷物商	155	0	3	8	19	3	188
kereste ve malzeme-i inşaiye	木材・建材商	36	0	0	24	48	0	108
attariye, drügist ve mawad-i kimiviye	薬種商, 薬屋, 化学薬品	112	0	8	18	53	6	197
yağ ve zeytin yağı ticarethaneleri	油・オリーブ油商	29	0	2	1	131	0	164
halı	絨毯商	38	49	11	39	6	4	147
deri	毛皮商	16	0	2	31	40	3	92
hububat	穀物商	13	0	0	3	34	1	51
kürk ve kürkci	毛皮商	21	0	3	22	12	4	62
gemi tehzatı	配船業	3	0	0	3	11	1	18
tuzlu balık	塩魚	2	0	0	0	31	1	34
afyon	アヘン	2	0	0	0	1	5	8
合計		594	149	175	347	622	581	845

出所: 1330 senesi İstanbul Belediyesi İhsaiyat mecmuası, Dersaadet, 1331, S. 298.

されていたことが分る。

イスタンブルにおける中継貿易はイラン、ザカフカスで織られた絨毯がこの町に船で運びこまれ、ヨーロッパ、アメリカへ再輸出されるための中継の卸売り取引が行なわれるだけにとどまらなかった。技術的な点からすると、イスタンブルは絨毯をここで洗い直し、ほころびを繕って商品価値をさらに高めるといふ役割も負わされていた。とくに洗淨は汚れをとるといふ目的のためだけに行なわれたわけではなく、これをすることによって古色蒼然たる趣を絨毯に与え、値段をつり上げるというねらいがあったといわれている⁽⁸¹⁾。

イスタンブルはイランとの絨毯貿易において常にもっとも重要な中継地の役割を果たしてきた。しかし、第一次世界大戦の勃発はそれまでこの町が有してきた中継地としての地位を揺るがすことになった。ドイツ、オーストリアと同盟し、参戦したオスマン朝は大戦中、戦略的見地からボスフォラス海峡を閉鎖した。これに加えて大戦以前、7%であった関税率が引き上げられ、これによってイランから運びこまれる絨毯の量は激減し、イスタンブルは絨毯の中継貿易で得ていた利益を失うことになった⁽⁸²⁾。

トルコ共和国成立直後の1923年、イスタンブル商業会議所によってまとめられた経済報告書によると、大戦後、イラン絨毯の中継貿易の中心はロンドンに移り、これに伴って絨毯の卸売り取引に携わるイラン人、アルメニア人の商人が大挙して事務所をロンドンに移したことが報じられている。イスタンブル経済にとってこのことは中継貿易の利を失ったにとどまらず、ようやくさかんになってきたトルコ絨毯の輸出をも鈍化させかねない深刻な問題を投げかけることになったのである⁽⁸³⁾。

本稿は1870年代より盛んになってきたタブリーズの絨毯貿易に焦点をしばりつつ、イラン国内での絨毯の生産の問題に触れ、イスタンブルの中継貿易地としての性格にまで言及した。これによってイラン＝トルコ間の貿易関係、都市ネットワークの一端が明らかにできたとすれば望外の幸せである。

[略記]

GBPP Great Britain Parliamentary Papers
A & P Accounts & Papers
DCR Diplomatic and Consular Reports
AS Annual Series

- 1 Charles Issawi, "The Tabriz-Trabzon Trade, 1830-1900: Rise and Decline of a Trade Route." *IJMES*, I (1970), pp. 18-27.
- 2 "Tabreez: Report by Consul General Jones", GBPP 1873 LXVII, p. 364.
- 3 テヘランについては坂本勉「19世紀テヘランの人口調査資料」(『オリエント』27-1), 92-108頁, および Mansoureh Ettehadieh, "Patterns in urban development; the growth of Tehran (1852-1903)." E. Bosworth & C. Hillenbrand (eds.) *Qajar Iran, 1800-1925: Political, social and cultural change*. Edinburgh, 1984, pp. 199-212 を参照のこと。ガズヴィーンに関しては Sayyid Muḥammad 'Ali Ghulriz (ed.), *Minudar ya Bab al-Jannah-yi Qazvin*. Tehran, 1337KH., pp. 391-404 に 1880/81 年実施の人口調査が抜粋して紹介されている。コムについては Muḥammad Taqī Bik Arbab (Kushish. Mudarresi Tabataba'ī), *Tarikh-i Dar al-Iman-i Qum*, Qum, n. d..
- 4 Houtoum-Schindler, *Eastern Persian Irak*, London, 1896, pp. 119-20.
- 5 "Report by Mr. Thomson, Her Majesty's Secretary of Legation, on the Population, Revenue, Military Force, and Trade of Persia." GBPP 1867-68, LXIX, A & P 30, p. 249.
- 6 "Tabreez: Report by Consul General Jones", GBPP 1873 LXVII, p. 364.
- 7 "Report on the Agricultural Resources of the Province of Azerbaijan, District of Tabreez, by Abbott." GBPP 1888, CII, A & P 38, DCR AS 423, p. 2.
- 8 "Report by Mr. Thomson, Her Majesty's Secretary of Legation, on the Population, Revenue, Military Force, and Trade of Persia." GBPP 1867-68, LXIX, A & P 30, p. 252.
- 9 Sayyid Muḥammad 'Ali Jamalzadīh, *Ganj-i Shayigan*, Tehran, 1342, p. 38.
- 10 "Report on the Trade of North-Western Persia for the Year ending March 21, 1890, by Consul-General C.E. Stewart." GBPP 1890-91, LXXXXVII, A & P 40, DCR AS 798, p. 2.
- 11 "Tabreez: Report by Consul General Jones", GBPP 1873 LXVII, p. 377-78.,

- 12 “Report on the Trade of the Province of Azerbaijan for the Year 1893-94, by Cecil G. Wood.” GBPP 1894, LXXXVII, A & P 37, DCR AS 1440, p. 6.
“Report on the Trade of Azerbaijan for the Year 1900 by Consul-General C.G. Wood.” GBPP 1901, LXXXIV, A & P 48, DCR AS 2685, p. 13.
- 13 “Report on the Agricultural Resources of the Province of Azerbaijan, District of Tabreez, by Abott.” GBPP 1888, CII, A & P 38, DCR AS 423, p. 2.
- 14 後藤晃「19世紀イランにおける貿易の展開と社会経済構造の変容 I」(『東洋文化研究所紀要』第百七冊), p. 212.
- 15 オーウェン (野口健彦, 栖原学訳) 『未完のブルジョワジー ——帝政ロシア社会におけるモスクワ商人の軌跡, 1855-1905』(文真堂, 昭和63年), 164-65頁。
- 16 “Report on the Trade of the Province of Azerbaijan for the Year 1893-94, by Cecil G. Wood.” GBPP 1894, LXXXVII, A & P 37, DCR AS 1440, p. 4,
後藤晃, 前掲論文, pp. 217-18.
- 17 “Report for the Year 1887-88 on the Trade of Tabreez, by W.G. Abott.” GBPP 1888, CII, A & P 38, DCR AS 445, p. 3.
- 18 後藤晃, 前掲論文, pp. 209-11.
- 19 “Notes on British Trade and Foreign Competition in North Persia”, GBPP 1889, Miscellaneous Series 19, pp. 1-4.
- 20 岡崎正孝「19世紀後半のイランにおける養蚕業の衰退とギーランの農業の変化」(『オリエント』27-2), 73頁。
- 21 ギーランの病害対策については以下の1875年10月12日付のラシュト駐在イギリス領事チャーチルの報告に詳しく述べられている。“Report by Consul Churchill on the Silkworm Disease in Ghilan.” GBPP 1876 LXXIV, A & P 33, pp. 69-70.
- 22 “Tabreez: Report by Consul General Jones”, 1873, LXVII, p. 377. “Report by Consul General Jones on the Trade and Commerce of Tabreez for the year 1873.” GBPP 1875, LXXV, A & P 34, p. 207.
- 23 “Report by Consul General Abott on the Trade and Commerce of Tabreez for the year 1877-8.” GBPP 1878, LXXV, A & P 30, p. 1696.
- 24 “Report by Consul General Jones on the Trade and Commerce of Tabreez for the year 1873.” GBPP 1875, LXXV, A & P 34, p. 206-7.
- 25 *Ibid.*, p. 206.
- 26 *do.*
- 27 “Report by Consul General Abott on the Trade and Commerce of the

- Province of Azerbaijan for the year 1878-79." GBPP 1880, LXIII, A & P 34, p. 114.
- 28 "Report by Consul General Jones on the Trade and Commerce of Tabreez for the year 1873." GBPP 1875, LXXV, A & P 34, p. 206.
- 29 "Report by Consul General Abott on the Trade and Commerce of the Province of Azerbaijan for the year 1878-79." GBPP 1880, LXIII, A & P 34, p. 114.
- 30 "Report by Consul General Jones on the Trade and Commerce of Tabreez for the year 1873." GBPP 1875, LXXV, A & P 34, p. 206-7.
- 31 *Ibid.*, p. 207.
- 32 "Report by Consul General Abott on the Trade and Commerce of the Province of Azerbaijan for the year 1878-79." GBPP 1880, LXIII, A & P 34, p. 114.
- 33 "Report by Consul General Jones on the Trade and Commerce of Tareez for the year 1873." GBPP 1875, LXXV, A & P 34, p. 207.
- 34 "Report by Consul General Abott on the Trade and Commerce of the Province of Azerbaijan for the year 1878-79." GBPP 1880, LXIII, A & P 34, p. 115.
- 35 G.N. Curzon, *Persia and Persian Question*, Vol. I, London, 1966, p. 194.
- 36 イランの飢饉については岡崎正孝「カージャール朝下におけるケン栽培と1870-71年大飢饉」(『西南アジア研究』No. 31, 38-55頁)を参照のこと。
- 37 "Report by Consul-General Jones on the state of Trade in the province of Azerbijan during the Year 1872." GBPP 1873, LXV, A & P 27, p. 968.
- 38 *Ibid.*, p. 969.
- 39 "Report by Consul General Jones on the Trade and Commerce of Tabreez for the year 1873." GBPP 1875, LXXV, A & P 34, p. 206-7.
- 40 "Report by Consul-General Abott on the Trade and Commerce of the Province of Azerbaijan for the year 1878-79". GBPP 1880 LXIII, A & P 34, p. 114.
- 41 D. Wright, *The English amongst the Persians during the Qajar Period 1787-1921*. London, 1977, p. 99.
- 42 *do.*
- 43 筆者の調査によるかぎりテグラー商会関係の文書は現在のところマンチェスタ

- 一市立図書館、同文書部、イギリス公文書館、ギルドホール・ライブラリー等の機関には所蔵されていない。
- 44 “Report for the Years 1892-93 and 1893-94 on the Trade, & c., of the Consular District of Ispahan.” (Report of a Journey made to Yazd, Kerman, and Shiraz, and on the Trade & c., of the Consular District of Ispahan, by J.R. Preece.” GBPP 1894, LXXXVII, A & P 37, DCR AS 1376, p. 56.
- 45 *Ibid.* pp. 56-59.
- 46 *Ibid.*, p. 54, 59.
- 47 *Ibid.*, p. 59.
- 48 *Ibid.*, p. 58.
- 49 *do.*
- 50 *Ibid.*, p. 57.
- 51 *do.*
- 52 *Ibid.*, p. 54.
- 53 *do.*
- 54 *Ibid.*, p. 61.
- 55 *do.*
- 56 *do.*
- 57 *Ibid.*, p. 58.
- 58 “Report on the Trade and Commerce of Ispahan and Yezd for the Year 1894-95, by Preece,” GBPP 1896, LXXXVIII, A & P 40, DCR AS 1662, p. 6.
- 59 “Report for the Years 1892-93 and 1893-94 on the Trade, & c., of the Consular District of Ispahan. (Report of a Journey made to Yazd, Kerman, and Shiraz, and on the Trade & c., of the Consular District of Ispahan, by Preece.” GBPP 1894, LXXXVII, A & P 37, DCR AS 1376, p. 58.
- 60 *do.*
- “Report for the year 1887-88 on the Trade of Tabreez, by W.G. Abott.” GBPP 1888, CII, A & P, p. 3.
- 61 “Report for the Years 1892-93 and 1893-94 on the Trade, & c., of the Consular District of Ispahan. (Report of a Journey made to Yazd, Kerman, and Shiraz, and on the Trade & c., of the Consular District of Ispahan, by J.R. Preece.” GBPP 1894, LXXXVII, A & P 37, DCR AS 1376, p. 60.
- 62 “Report for the Years 1892-93 and 1893-94 on the Trade, & c., of the

- Consular District of Ispahan. (Report of a Journey made to Yazd, Kerman, and Shiraz, and on the Trade & c., of the Consular District of Ispahan, J. R. Preece." GBPP 1894, LXXXVII, A & P 37, DCR AS 1376, p. 60.
- "Report on the Trade and Commerce of the Consular District of Ispahan for the Year 1896, by Preece." GBPP 1897, XCII, A & P 41, DCR AS 1953, p. 6.
- 63 *do.*
- 64 "Report on the Trade and Commerce of Ispahan and Yezd for the Year 1894-95, by Preece," GBPP 1896, LXXXVIII, A & P 40, DCR AS 1662, p. 10.
- 65 *do.*
- 66 "Report for the Years 1892-93 and 1893-94 on the Trade, & c., of the Consular District of Ispahan. (Report of a Journey made to Yazd, Kerman, and Shiraz, and on the Trade & c., of the Consular District of Ispahan, by J.R. Preece." GBPP 1894, LXXXVII A & P 37, DCR AS 1376, pp. 30-31.
- 67 *do.*
- 68 *Ibid.*, p. 33.
- 69 "Report on the Condition and Prospects of British Trade in Persia by H.W. Maclean, special Commissioner of the Commercial Intelligence Committee of the Board of Trade." GBPP 1904, XCV, A & P 47, p. 32.
- 70 "Report for the year 1898-99 on the Trade and Commerce of Azerbaijan." GBPP 1899 CI, A & P 51, DCR 2291, p. 8.
- 71 *Ibid.*, p. 9.
- 72 *do.*
- 73 "Report for the year 1900 on the Trade of Azerbaijan." GBPP 1901, LXXXIV, A & P 48 DCR 2585, p. 17.
- 74 "Report on the Condition and Prospects of British Trade in Persia by H.W. Maclean, special Commissioner of the Commercial Intelligence Committee of the Board of Trade." GBPP 1904, XCV, A & P 47, p. 33.
- 75 "Report for the year 1900 on the Trade of Azerbaijan." GBPP 1901, LXXXIV, A & P 48, DCR 2585, p. 17-18.
- 76 "Report on the Condition and Prospects of British Trade in Persia by H.W. Maclean, special Commissioner of the Commercial Intelligence Committee of the Board of Trade." GBPP 1904, XCV, A & P 47, p. 33.
- 77 *do.*

- 78 Aḥmad Kasravi, *Zindigani-yi Man*, Tehran, 1323A. SH. pp. 5, 17, 19-20.
- 79 Sayyid Muḥammad ‘Ali Jamalzadih, *Ganj-i Shayigan*, Tehran, 1362A. SH, p. 20.
- 80 *Ibid.*, p. 21.
- 81 *Ticaret ve Sanayi Odasında müteşekkil İstanbul İktisad Komisyonu tarafından tanzim olunan Raporu*, 29 *Kanun-i sani* 1340-1924-26 *Teşrin-i sani* 1340-1924, İstanbul, 1341, s. 30.
- 82 *Ibid.*, s. 29-32.
- 83 *do.*